



初代校長 惣津律士氏胸像

# 学園だより

地方競馬益金事業  
No.15  
1983年9月1日発行  
財団法人  
中国四国酪農大学校  
電話 086766-3651

## 巻 頭 言

校長 三村 剛

卒業生の皆さん、お元気で御活躍のことと思います。

わが学園も昭和三六年創立以来、すでに二二年を経過し、そのうち財

団法人になりましたから一八年目を迎え、卒業生の数も総計六一五名

(内女子五三名)を数えるに至りました。

これら卒業生諸君の約八割が酪農経営に従事され、またその他の諸君

も農業団体など、関係団体に勤務されているやに承っております。こう

して各地域において、次の時代を担う若い同志が、地域のリーダーとし

て、また推進力となって活躍されていることは誠に力強くうれしいこと

です。

年々三〇〜四〇名が巣立っていた頃

に比べて、近年は畜産情勢の影響とは思いますが、学生数の減少が続

き、若干寂しい思いがします。しかしながらいかに僅少でも農業を守り

はその意義は大きく、貴重なものと思

います。僅かながらも同志仲間を増え

続けていきますので絆を大切にしまし

よう。

事実、卒業生の諸君が、中国、四

国各地域において酪農自営に本領を

発揮されている傍ら、常に地域のリーダー

として或は中堅幹部として地域農業の

推進のため、主要な役割を果たして

おられる様子を拝聴するた

びに、本校教育事業の成果が結実している

ものと喜び、又事業に精進されている

各位に敬意を表する次第です。

現在学校では、一年生諸君一八名

が日夜学習に懸命の努力をしています。

二年生諸君はそれぞれ各地に校外

研修にいそしんでいます。

来年はジャージー牛導入三〇周年

にあたり岡山県に全国のジャージー

関係者が集って記念行事が行なわれ

ます。

その一環として第二回全日本ジャ

ージー共進会が当川上村農村広場と、

本校体育館を舞台に開催される運び

となっておりますので、どうか皆様

気軽に御来校いただき、その後の様

子御意見などお聞かせいただければ幸

甚に存じます。

おわりに皆様方の御活躍と健康を

お祈りいたします。

### 目次

巻 頭 言	1
酪農大学の現状	2
牧場の現況	2
第一牧場	2
第二牧場	4
ブラジル国派遣農業実習に	
参加して	6
人の動き	8
十七期生卒業生名簿	9
十九期生入学生名簿	10



# 酪農大学校の現状

教育部長 磯山旭輝

固苦しい話、格調高い話はお預けして、各地で御活躍の卒業生の皆さんに、本校の近況と私的感想をちょっぴりと……。

私は去る四月に着任したばかりの若輩ですが、以前から何んとな

「いつかは酪農大に行かなくてはならない」「一度は行ってみたい」

そんな予感のようなものを持ち続けておりました。それがとうとう現実となってしまったのです。

土帰月来の当初、蒜山三座と麓に広がる牧草地を見るたびに「また蒜山にやって来たな」そんな感じがしたのですが、最近では「おうっ、蒜山に帰ったぞ」そんな感じです。

新入生も一人の落ちこぼれもなく、すっかりこの地に馴染んだようです。昨今の酪農情勢を反映してか、在校生はやや少人数となっておりますが、みんなよく働き、実に真面目です。

ただ、学校をとりまく環境は急激に変貌し、第2牧場周辺は今や観光

地の真ただ中、本校放牧地での流行歌手によるサマーミュージックフェスティバル、度重なる物見遊山客の来訪等、酪農を志し、酪農の将来を真剣に語り合う実践教育の場としては一抹の不安を抱かずにはおられません。

過ぎし日学生服、学生帽に身を固め、校歌を口ずさんだ先輩諸氏には、カラフルな姿にパーマ頭のナウい学生達と、当地の開発(？)に隔世の感一入かと思えます。

そうは言っても、まだ蒜山、去る七月十三日にはしばらく跡絶していた蒜山登山を敢行し、職員、学生共々大いに本物の自然を満喫しました。

さて、生乳生産も皆さんの努力が実って順調そのもの、五月下旬には第一牧場では搾乳牛三〇頭余で日量七三〇kg、第二牧場では搾乳牛約八〇頭で日量一、二五〇kgをそれぞれ記録し、いずれも過去最高と聞いております。

しかし、飼養管理の改善による能

力の向上には限界があり、今後は能力検定成績を活して駄牛(？)淘汰が思い切って行えるような経営にしなければならぬと意気込んでおります。

最後に酪農関係の仕事にいささかでも携った者の浅知恵ですが、牛乳生産の増産基調は長い目で見たら好ましい現象と確信しております。消費者にとってはもちろんのこと、かつて生産が停滞した時期、いわゆる擬装乳製品等に姿を変え、海外から大量の乳製品がわが国市場に、密かに、しかも着実に忍び込み、その実績を更新してきております。

「止まなかった雨はない」「醒めなかつた興奮はない」、酪農界のこの苦境にも必ず終りがあります。

「経営者として、技術者として優れた酪農家の将来は明るい。」

在校生はもとより、本校卒業生の皆さんには酪農に誇りをもって取り組んでいただくよう切望して止みません。健康に留意して共に頑張りましょう。

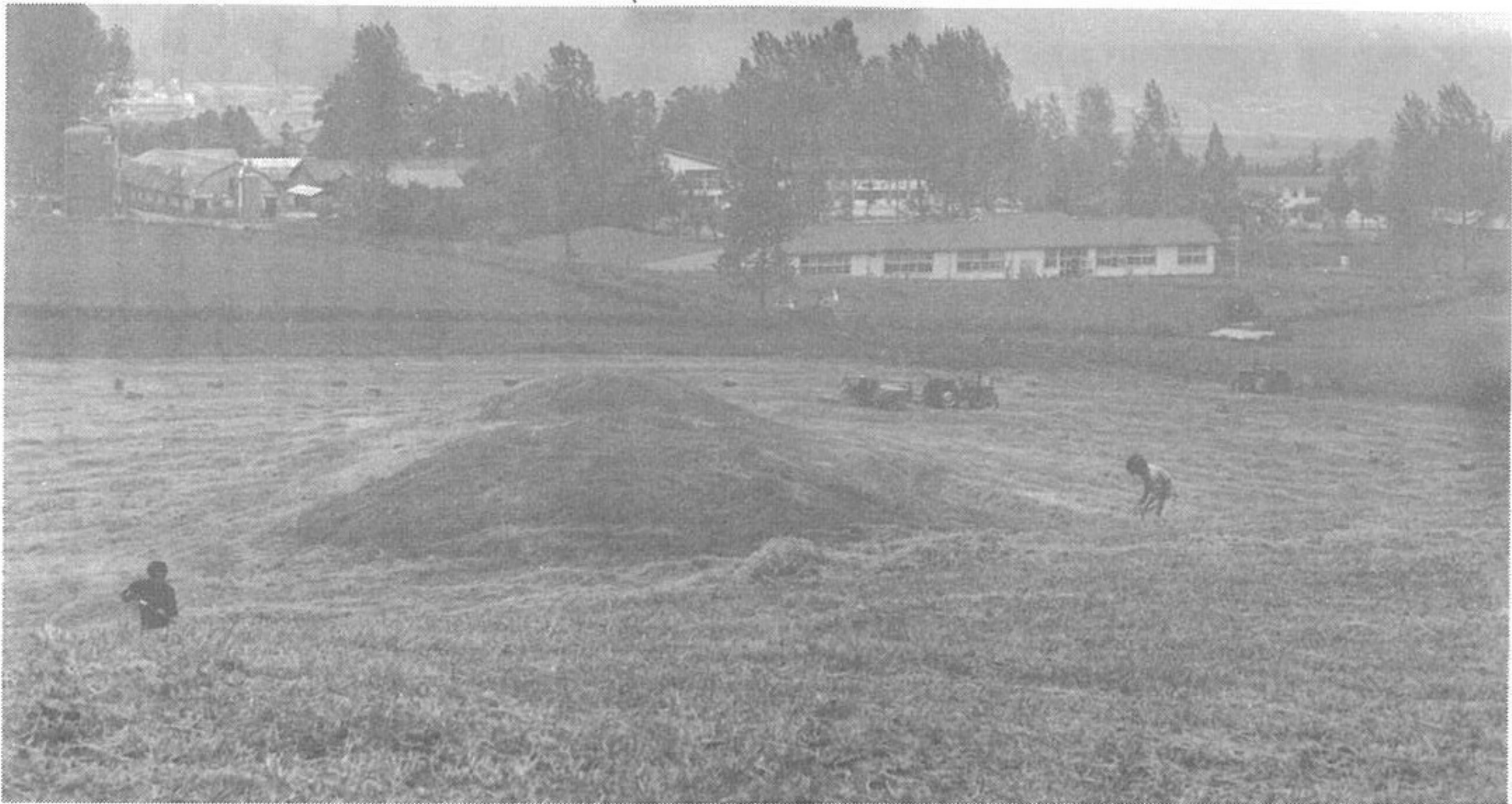
## ▲ 牧場の現況 ▼

### 第一牧場だより

卒業生の皆さん、お元気で、御活躍のことと思います。一牧の飼料畑のトウモロコシが早やくも出穂しました、季節の移り変わりの早さに驚か順調にはかどりました。話は変わりますが、昨年の八月に台風が蒜山を通過し、卒業生の方に



収穫を待つトウモロコシ



四牧区掃除刈り

表1. 第1牧場飼養頭数

(58. 4. 1 現在)

区分	成 牛				育 成 牛			合 計
	搾乳牛	乾乳牛	未経産牛	小 計	12~18 カ月令	12カ月 令未満	小 計	
雌	32	5	7	44	5	8	13	57
雄	—	—	—	—	H 19	J 4 H 28	J 4 H 47	51
計	32	5	7	44	24	40	64	108

は今もなつかしく思い出されるあのポプラ並木が根こそぎ倒され、その後、生徒と職員総出で後片付けに汗を流しました。

さて第一牧場の現況ですが、五八年四月の職員異動で、上原場長、赤田技師が転勤し、後任として、中山場長、西谷技師がそれぞれ配置になりました。蒜山の地におい出のときは、

一、飼養頭数

昭和五八年四月一日現在、第一牧場で飼養している頭数は、表一で示

二、生乳生産状況

月別の生乳生産状況は表二、に示すとおりです。先輩方の適切な改良増殖及び飼養管理等により、年々一頭当りの泌乳量は増加しています。また五八年度においても、四月から七月末日までではありませんが、牧草の生育が良く、泌乳量は計画をオーバーしています。

三、自給飼料の生産状況

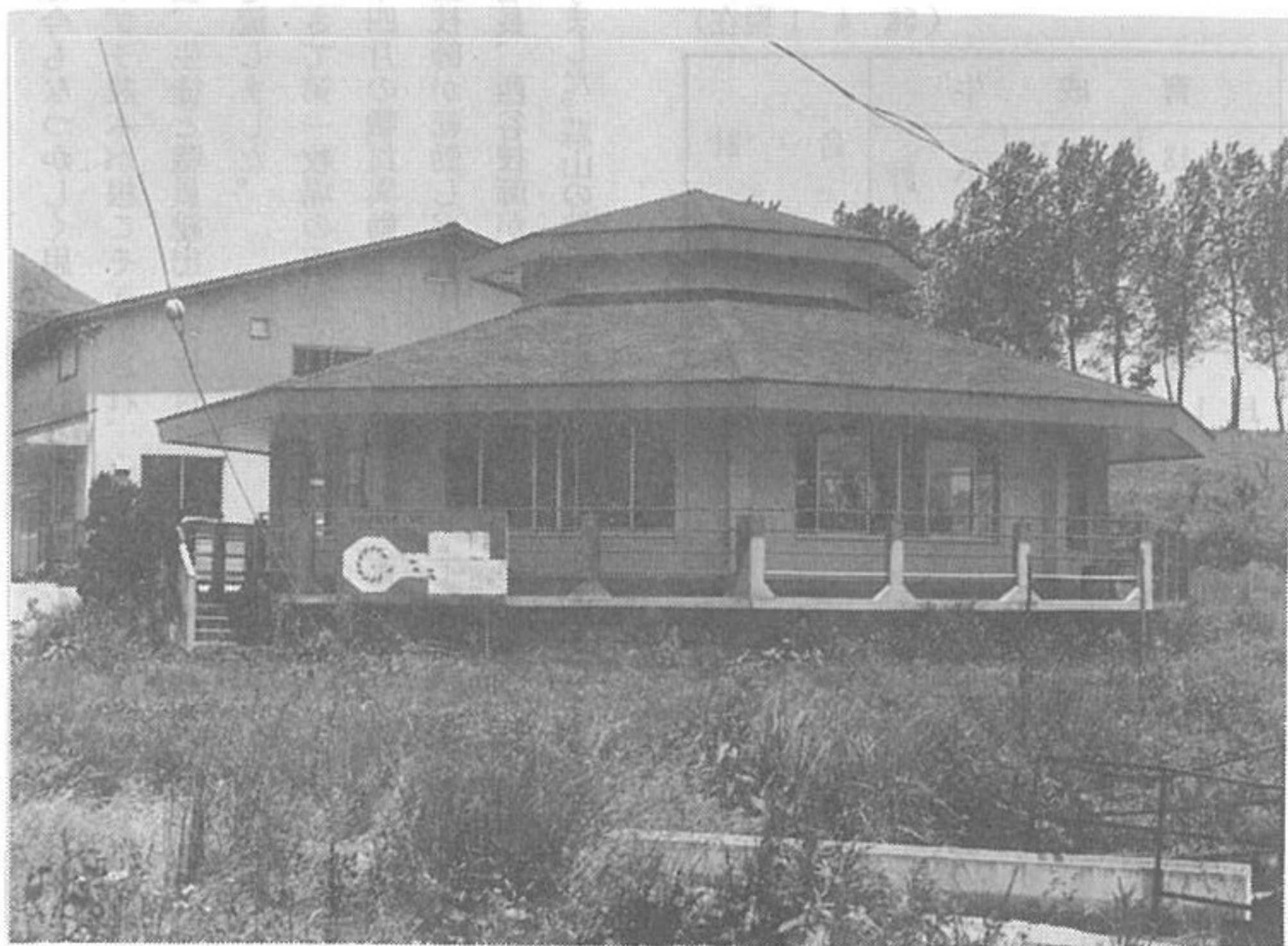
前述しましたが、春先からの好天候により、牧草の生育が良好で、イタリアンライグラス（作付面積二・六ヘクタール）、及び放牧専用地の掃

表2. 月別生乳生産状況

区 分		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
総 乳 量	56年度	15,453	17,694	16,088	15,292	14,019	13,541	14,133	14,803	14,300	11,117	9,989	14,889	168,295
	57年度	16,055	20,324	17,798	17,880	16,769	14,598	12,826	11,939	12,045	14,141	15,101	18,910	188,393
	前年比	103	114	110	116	119	107	90	80	84	127	151	127	111
一 日 一 頭 当 り 平 均 乳 量	56年度	17.8	19.4	18.0	17.6	15.3	16.0	15.6	16.6	16.8	15.1	14.9	16.6	16.6
	57年度	18.1	20.9	17.8	17.9	16.9	14.9	14.9	14.6	15.0	17.4	19.6	19.6	17.4
	前年比	101	107	98	101	110	93	95	87	89	115	134	118	104



台風で倒れたポプラ並木の後片付け



ミルクングバーラ

除刈(六・七ヘクタール)の乾草を  
 二、〇四〇梱包(約三三三トン)調整  
 確保することが出来ました。  
 昭和五八年度の飼料作物作付計画  
 は、トウモロコシ五・七ヘクタール、  
 イタリアン五・二ヘクタールを予定  
 しており、トウモロコシは生育も順  
 調で八月下旬には約二百トンのホー  
 ルクロップサイレージを調整出来る  
 と思います。  
 又、今年は肥育育成期の粗飼料とし  
 て野乾草(カヤ主体)を三・三三三  
 収草しました。  
 最後に卒業生の皆様のご健勝とな  
 るお一層のご活躍をお祈りいたします。

## 第二牧場だより

卒業生の皆さんお元気ですか。二一、職員の異動について  
 牧も乾草、サイレージ、トウモロコシ等、職員一同相変わらず元気で働  
 いております。さて、去年からの二牧の現状をお知らせします。  
 五人は昨年通りですので、いつでも  
 西谷技師が一牧に降りて、新任の  
 山本技師が慣れない作業や機械に戸  
 惑いながらも頑張っています。他の

気軽においで下さい。  
 二、ジャージー牛の飼育状況  
 昭和58年4月1日現在の飼育状況  
 は表1及び表2のとおりです。年々  
 淘汰更新され皆さんの思い出に残る

表1 ジャージー牛の飼養状況

区分	成牛			小計	育成牛			小計	合計
	搾乳牛	乾乳牛	未經産牛		12~18ヶ月令	6~12ヶ月令	6ヶ月令未		
雌	71	28	10	109	11	9	15	35	144
雄					20 4		3	27	27
計	71	28	10	109	35	9	18	62	171

表2 ジャージー種(成牛)の年令別構成

年令	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	合計
頭数	1	2	4	3	5	8	11	17	13	15	19	1	99
比率	1.0	2.1	4.2	3.1	5.2	8.3	11.5	17.7	12.5	14.6	18.8	1.0	100

表 3 月別生乳生産状況

単位：kg

区 分		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合 計
総乳量	56年度	21,626	29,624	29,609	25,080	24,799	24,578	24,928	23,834	19,888	21,343	19,074	22,194	286,577
	57年度	23,617	32,549	30,843	32,274	28,959	23,541	24,306	26,509	27,863	28,678	22,645	26,383	328,166
	前年比	109	110	104	129	118	96	98	111	140	134	119	119	115
一平均頭均当乳り量	56年度	8.9	10.7	11.2	9.7	9.9	10.2	9.9	10.3	8.1	8.8	8.9	9.3	9.7
	57年度	9.5	12.7	12.0	12.2	11.4	10.9	10.8	11.3	11.8	11.7	10.8	12.4	11.5
	前年比	107	119	107	126	115	107	109	110	146	133	121	133	119

牛は少なくなっていますが、それらの子牛や孫等が次々と保留されています。

三、ジャージー牛の飼養状況  
57年度は、皆さんの努力により生乳生産をアップすることができました。月別の生産量は表3のとおりです。

四、自給飼料の生産について  
牧場内の草地は表4及び図1の様に区分され、総面積64.6haを表の様に利用しております。皆さんも覚えのある春先のバンガーサイロ、夏は乾草、トウモロコシ刈取等、少しでも多くの収量を上げようと全員で努力しております。

五、肥育の現状  
牛肉需要の増大に対処するため、昭和54年度から、低コスト肥育牛生産事業を実施しております。現在ホルスタイン20頭、ジャージー4頭を、旧三木ヶ原寮を改造した牛舎において飼育し、肥育後期を受持っております。

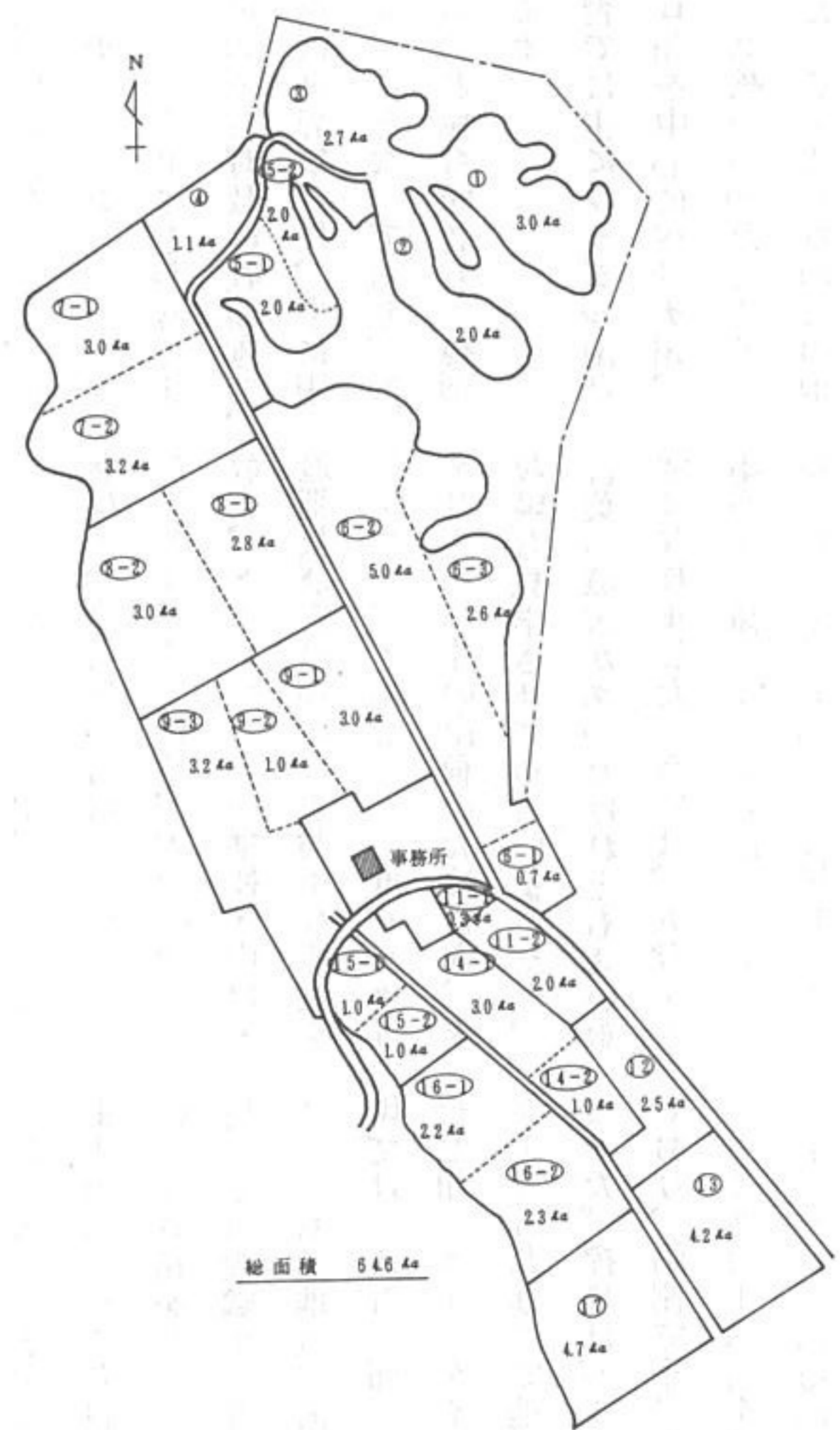
以上第二牧場の近況についてお知らせしましたが、今後更に牧場発展のため場員一同頑張っていくつもりです。

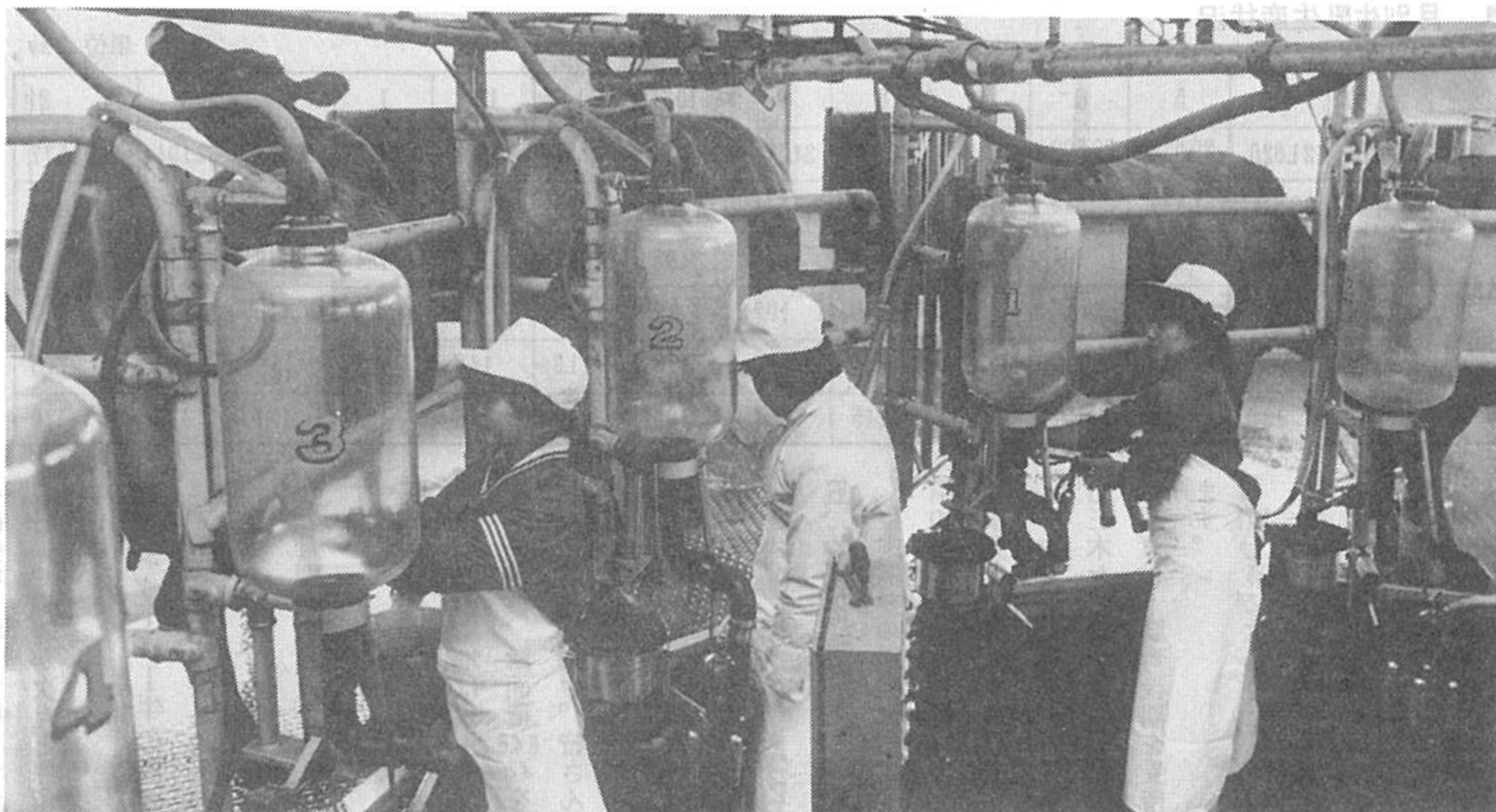
最後に卒業生皆さんの健康と御活躍をお祈り致します。

表 4 草地利用状況

図 1 第二牧場草地略図

牧 区	面 積 (ha)	利 用 状 況		
		1 番 草	2 番 草	3 番 草
1	3.0	サイレージ	乾 草	青 刈
2	2.0	"	青 刈	"
3	2.7	"	"	"
4	1.1	乾 草	放 牧	放 牧
5	4.0	放 牧	"	"
6 (1)	0.7	サイレージ	"	"
6 (2)	5.0	"	トウモロコシ	イタリアン
6 (3)	2.6	放 牧	放 牧	放 牧
7 (1)	3.0	"	"	"
7 (2)	3.2	"	"	"
8 (1)	2.8	"	"	"
8 (2)	3.0	"	"	"
9 (1)	3.0	"	"	"
9 (2)	1.0	"	"	"
9 (3)	3.3	"	"	"
11	0.3	"	"	"
12 (1)	2.0	"	"	"
(2)	2.5	"	"	"
13	4.2	サイレージ	乾 草	放 牧
14 (1)	3.0	放 牧	放 牧	"
14 (2)	1.0	"	"	"
15	2.0	"	"	"
16 (1)	2.0	乾 草	"	"
16 (2)	2.5	"	"	"
17	4.7	"	乾 草	"
計	64.6			





乳を搾りています。

### 搾 乳 実 習

私は昭和五六年度(第三回)岡山県ブラジル国派遣農業実習生として、十一月から半年間ブラジルで実習してまいりました。ブラジルという国は大部分南半球にあり日本とは対照的な位置にあります。その面積は我國の約二十二倍もあり、まだまだ未開発のところも多くあります。ブラジル産業の基盤は農牧林業であり、特に世界最大の生産高を誇るものにコーヒーやバナナ、マンジョカ、フェジョン豆、パイヤなどがあります。その他世界でも有数の牧畜国で、豚の飼養頭数は世界第二位、牛に限っても第四位となっており、肉牛生産も進められ飼育頭数も一億頭を超えています。

今回の実習では主にブラジル南部のサンパウロ州を中心にパラナ州、ミナスジェラス州といったところで行ないました。このような南部の地には日本人の入植者の九割以上が集中しており、岡山県出身者の農場四カ所で、それぞれ約一カ月づつ実習をいたしました。

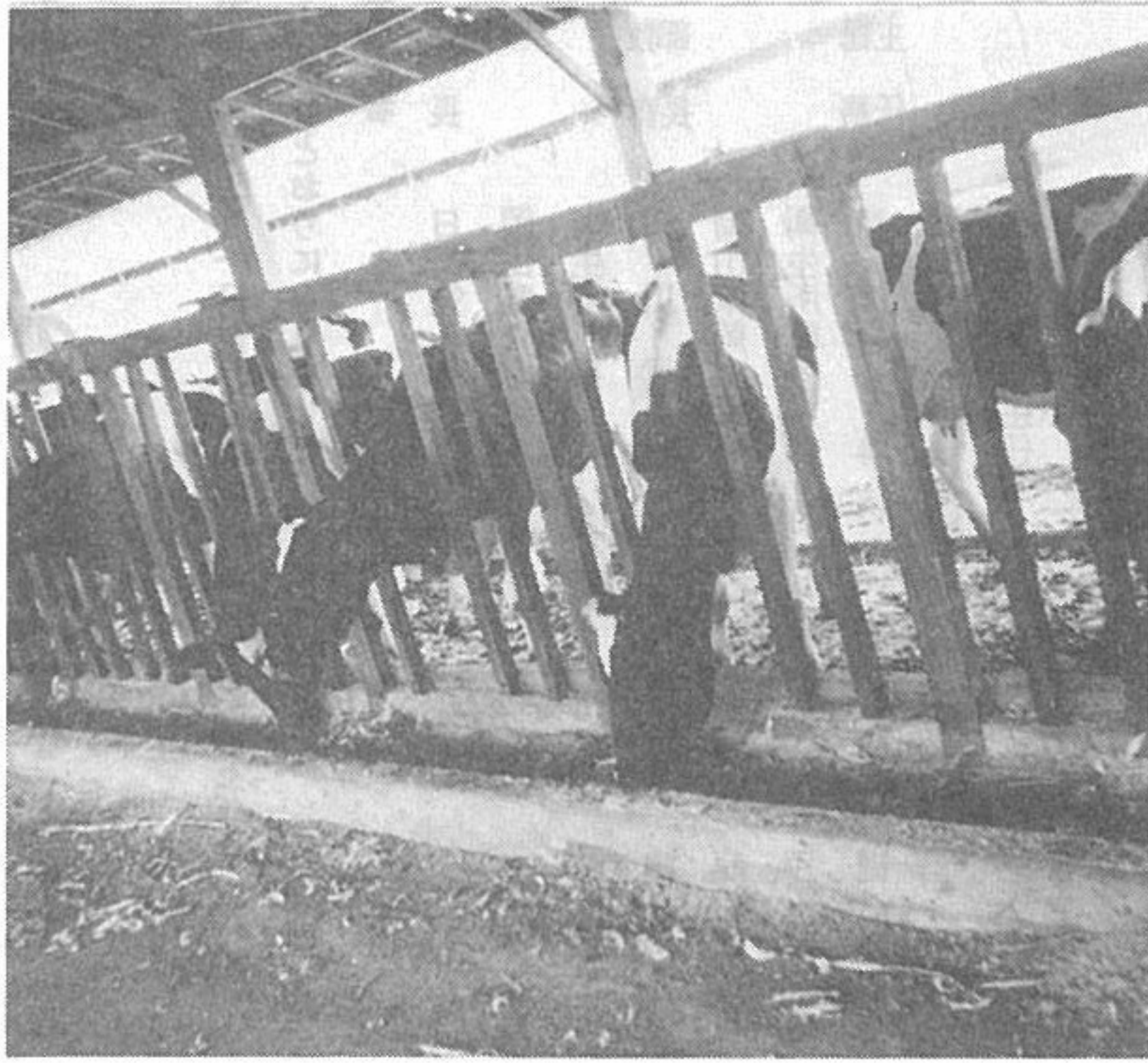
さて十一月六日に日本を出発し、いよいよ十一月十六日から最初の実習先であるパラナ州カストロにある柏野農場で実習に就きました。この農場は、肉用牛の飼育の他大豆、トウモロコシ、タマネギ、人参、馬鈴薯などの作付けを行っていました。ここでは乾草、採草、大豆の除草剤散布、トウモロコシの播種・中耕・追肥及び実の粉碎など貴重な体験をいたしました。こんな中で一度サンタカタリナ州へ牛の出荷のため行き、屠殺場も見学させていただきましたが、言葉の障害があったけれどもよい勉強になりました。今では、実習中大雨がよく降りず濡れになって作業をしたことも、なつかしく思われます。

## ブラジル国派遣 農業実習に参加して

第十八期生 安藤 功 史

次の実習は、十二月二十八日から一月二三日までサンパウロから二時間以内のモジダス・クルーゼスにあるピラシカバ大学野菜育種試験場で都市近郊型農業について学びました。ここでは野菜、果樹作りが大部分を占めておりましたが、私はトウモロコシの成長記録、ナスの交配、キャベツの植付、人参の間引きなど細かい仕事を中心に実習しました。この期間中には大学から近くの養鶏場や野菜農家を見学に行きました。

第三番目はサンパウロ州ランシャリアの小沢農場で、一月二四日から実習させて頂きました。この農場は面積三、六七二haあり、牛八五〇頭、鶏八、〇〇〇羽、豚二二〇頭を飼養しておりましたが、もとは養鶏のみであったとのことでした。といいましますのは、その昔日本人入植者は一〇〇%養鶏をしておりましたものが、最近では養鶏から養蚕へと転換を計りつつある地域であります。この農場では牛八五〇頭のうち、搾乳牛は七七頭(ホルスタイン種二二頭、ゼブー種五五頭)で他は肉用牛でありました。搾乳はパーラー方式を採用しており、両側で十二頭追込みでバケットミルカー六台を使って実施して行きました。この農場に到着した頃は



小沢農場の牛舎

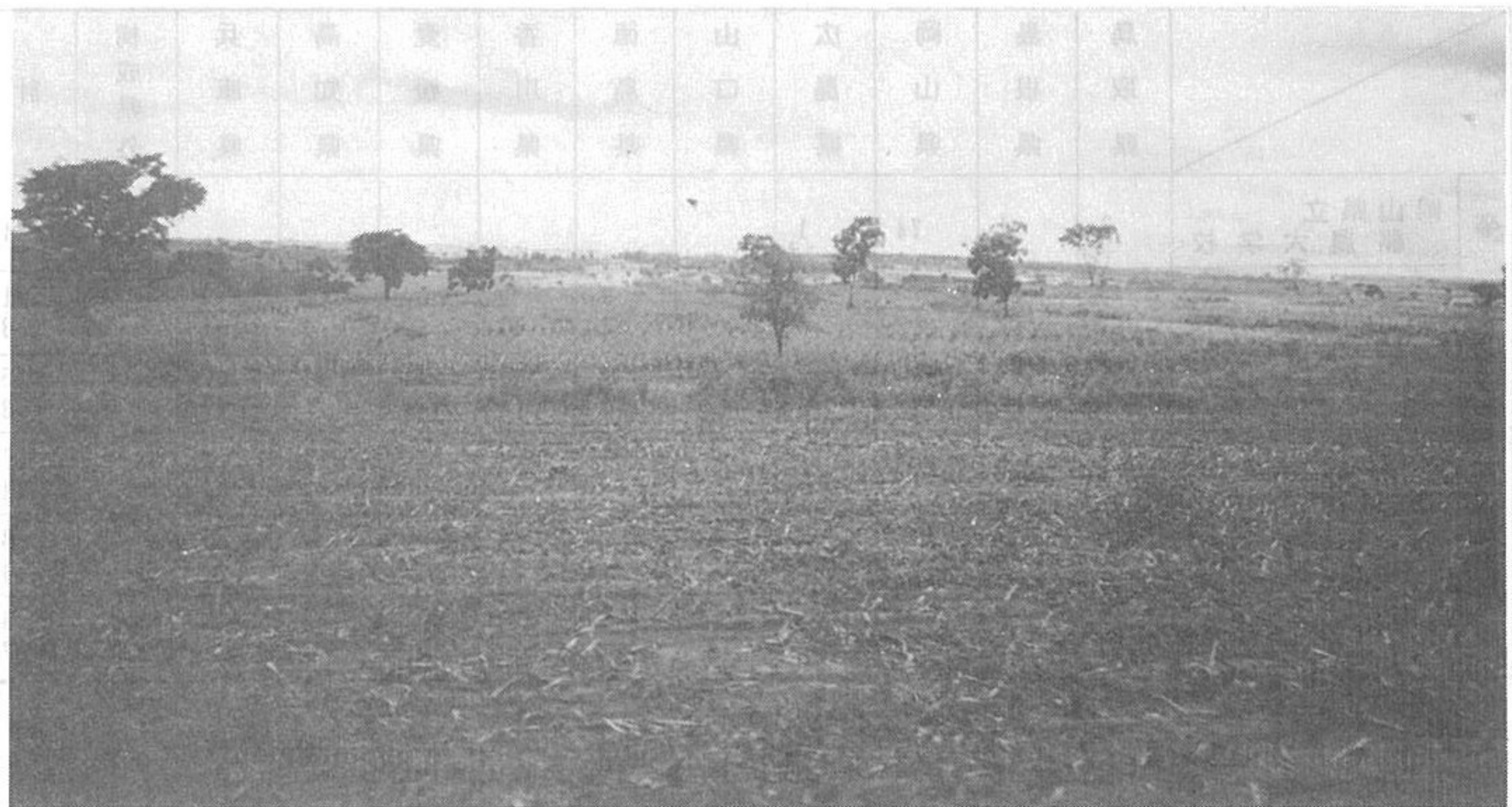
ちようどトウモロコシのバンカーサイロ詰込みの時期にあたっていたため、その作業が大部分でありました。その合い間をぬって牛ダニの殺虫や、搾乳、パドック舎内の糞取りならびにパーラー洗滌などを行ないここで初めてブラジル酪農というのを体験することができました。

最後の実習先である水本養鶏場へは二月十五日に到着し、三月三日まですることになりました。ここでの実習は鶏舎での飼料給与、集卵及びスイカの収穫実習を行ないました。しかし洗卵場の倉庫建築や新しい養鶏場の建築といったことに日数がかかり他のことはあまり出来ませんでした。自分で実際に棟組、棟上げ、屋根はりまでさせてもらいいい勉強になったと同時に、大変大きな仕事ができ、また記念になりよい思い出ができました。

四月一日から移動研修旅行に出ました。ラバラス大学で牛や牧草地を見学し、またサンゴタルドでは、日系人の多いコチア産業組合を訪ねて果物、コーヒーなどの農場を見学しました。次いで首都ブラジリアを見学したあと、ソベロンプレット大学の博物館を見学しました。またバストスではマユや絹を見学させてもらい十七日間にわたる移動研修を終りました。

この半年間の実習をふり返ってみると、日本とは随分環境の違うなかでの生活は苦しいことばかりでしたが、なかには楽しいこともあり色々な面で勉強になりました。特に知らないところで言葉が通じないというのは寂しいものですが、二番目の実習先で建築にたずさわった時には回りの人はほとんど外人で言葉が通じませんが、最後にはある程度話ができる様にまでなれたことは全く嬉しい限りです。

このような機会は、一生に二度とないことなので実習に参加できたことは誠に幸せ者だと思っています。将来はこの実習で得た知識あるいは経験、さらにはブラジル移住した人の開拓者魂というものを取り入れ、我が家の酪農経営を発展させると同時に、地域の中核的酪農家になれるように努力していきたいと思えます。



小沢農場の広大な飼料畑

人 の 動 き

昭和五八年四月一日付けの定期異動で、次のとおりになりました。

○現職員名簿

○転出者

次長	日笠重雄	校長	三村剛
岡山県真庭家畜保健衛生所所長	西谷勝男	第一牧場 場長	伊藤述史
衛生所所長	渡部哲矢	第二牧場 場長	伊藤述史
兼川信昭	津田清子	技師	若田康茂
岡山県岡山家畜保健衛生所防疫主幹	池田富幸	技師	山本康廣
池田勝	戸田道子	助手	高橋俊彦
岡山県立岡山技術訓練センター主任	樋口知子	助手	磯田孝博
前田英称	磯山旭輝	技師	大石俊之
岡山県真庭地方振興局主任	野口竜三	技師	野口竜三
赤田高則	野口竜三	技師	野口竜三
岡山県井笠家畜保健衛生所技師	野口竜三	技師	野口竜三

出身校別卒業生  
及び在校生の状況

本校は昭和三六年十二月に岡山県立酪農大学校として設立され、昭和四〇年十一月には財団法人中国四国酪農大学校に改組され現在に至っております。

今年三月第十七期生が卒業し、開校以来の卒業生数も六一五名を数えることになりました。

また現在、第十八期生と第十九期生の三五名が実習・勉強に頑張っております。

下記の表は、開校以来の卒業生数と在校生数を県別で区分しました。



		鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	徳島県	香川県	愛媛県	高知県	兵庫県	構成県外	計
卒業生	岡山県立酪農大学校	3	1	74	1							5	84
	財団法人中国四国酪農大学校	19 (5)	43 (8)	270 (28)	40 (5)	22 (1)	9 (1)	29 (1)	31 (2)	21	40 (1)	7 (1)	531 (53)
	計	22	44 (8)	344 (28)	41 (5)	22 (1)	9 (1)	29 (1)	31 (2)	21	40 (1)	12 (1)	615 (53)
在校生	昭和57年入学	1	2	8 (2)	1		1			2 (1)	1 (1)	1	17 (4)
	昭和58年入学		4 (1)	6 (1)				1 (1)		1	5	1	18 (3)
	計	1	6 (1)	14 (3)	1		1	1 (1)		3 (1)	6 (1)	2	35 (7)

(注)：( )内は女子で内数とする



## 昭和五八年度（第一九期生）入学者

四月五日第一九期生の入学式挙行。栄えある入学式には、中国・四国農政局生産流通部長を始め、各構成県の理事及び多数の来賓各位の祝福を受け、一八名が入学しました。

### 編集後記

卒業生の皆さん、お元気で御活躍のことと思います。

今回の学園便りは年度当初職員の異動、並びに業務の関係で発行が遅れました。主にわが学園の現状、牧場の現況を記載しました。

本学園も昭和三九年に二〇名の卒業生を送りだして現在までに六一五名（女子五三名）の卒業生が巣立、地域酪農のリーダーとなって活躍中です。

今後、卒業生の皆さんと学園の発展のため連繫をますます深めて行きたいと思しますので、皆様からのお便り、御寄稿を期待しております。

